2022年9月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第548号

地方小出版 情報誌

アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

長崎文献社創立20周年

―白鳥の水かき！―

長崎の歴史文化を全国の読者と共有いたしたく「長崎文献社友の会」を立ち上げたい

文／代表取締役社長　片山仁志

歴史テーマをカジュアルにまとめた「長崎游学」（現在15巻）、最新版の15巻は「歩く楽しむ長崎街道」長崎楽会編／A5・定価（本体1200円＋税）ISBN978-4-88851-374-6

左から、『グラバー魚譜２００選』ISBN4-88851-100-4／『旅する出島　Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｄｅｊｉｍａ　１６３４－２０１６』ISBN978-4-88851-267-1／『私の軍艦島記　端島に生まれ育ち閉山まで働いた記録』ISBN978-4-88851-248-0／『ヒロスケながさき１００のひみつ』ISBN978-4-88851-359-3

1、朗報と現実

過日、2021年の紙の書籍の販売額が15年振りに前年を上回った！　という嬉しいニュースに接した。書店・出版会社の減少、活字離れ、電子書籍時代、と声高に言われ続ける世相、そこに舞い込んだ明るい話である。

と、喜んではみたものの、好調の要因は文芸書や児童書によるもので、歴史文化中心の当社の現実は、やはり厳しく決して甘くない。「白鳥の水かき！」が偽らざる現実である。

コロナ禍で売上高は落ちた。家庭で過ごす時間が増えれば読書の時間も増える、本も売れる、と一瞬夢みたが、期待し過ぎた。収入が増えなければ本は買えない、読書の余裕など生まれるはずもない。余韻が増し、その後もなかなか回復しない。

2、「成人・還暦」の地方小出版会社

当社は、今年創立20周年を迎える。一度行き詰まった後、地元財界文化人の篤志で、同じ会社名で再出発した。当初からすると60年になる。長崎の歴史文化を紐解く唯一の出版会社として認められ、株式会社としての再出発が可能となった。初期を除き、表向きは支援を受け辛うじて黒字決算を続けている。

再出発後20年間に、330点ほどの書籍を出版した。

ロングセラーの長崎県との共同企画「旅する長崎学」（全21巻）や歴史テーマをカジュアルにまとめた「長崎游学」（現在15巻）、近代化に貢献した人物にスポットをあてた「長崎偉人伝」（現在11巻）などのシリーズものには定評がある。

このほか、長崎の秘蔵絵葉集『華の長崎』、復元地図『復元！ 江戸時代の長崎』、『復元！ 被爆直前の長崎』、キリスト教テーマ漫画『愛のひと』、『愛のまち』、母と子の感動物語『愛してるよカズ』、平成時代の写真大作『平成長崎の記憶』、被爆の惨状を訴えた紙芝居、日本書籍出版協会理事長賞の受賞作『グラバー魚譜200選』、「ブックインとっとり」受賞の『旅する出島』、『私の軍艦島記』などが注目された。

2年ほど前『ヒロスケながさき100のひみつ』を出版した。子どものときから歴史を学び、読書に興味をもってもらいたいとの思いで、4コマ漫画を挿入、ルビを振り、読み易くした。小学3年生から「お小遣いで買って、入院中のおじいちゃんにプレゼントしたら、毎日読むのが楽しみ、と喜んでくれた」とのお手紙をいただいた。祖父と孫が微笑ましく団らんしている様子が思い浮かぶ。現在、20周年記念企画として、中高生を対象に日本の近

同社の社員は半数が女性。頼もしい熟年女性の活躍企業となっている

代化に貢献した「長崎人物事典」の編集に全力投球で取り組んでいる。

一方、地元の大学関係や公共団体、各種協会・団体、企業の周年誌等の大型受託もの、個性あふれる自分史や小説、随想、詩集等の受注も多い。

取り扱うジャンルは多種多様で大手の出版会社並みに拡がっている。編集者の挑戦に頭が下がる。著者、ライター、デザイナー、カメラマン等の方々にも恵まれている。

社員の平均年齢は70歳の高齢職場。給与水準は高くないが、高い使命感に支えられている。半数が女性、それも60歳前後。頼もしい熟年女性の活躍企業と自負している。

「長崎のことを知ろうと思えば“長崎文献社”」のエールに応えられるよう、これからも、みんなで力を合わせて頑張ろうと話し合っている。

3、長崎学という「学問」

長崎は、歴史文化の坩堝である。「長崎学」という学問があり、「学者」が多い。キリスト教の布教と禁教・弾圧・潜伏、江戸時代の出島文化（オランダ商館、丸山遊郭、西洋文化の伝播）、明治維新、それに被爆…。天領時代に形成された和華蘭文化、二つの世界文化遺産（長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産、明治日本の産業革命遺産）。

縦糸と横糸が織りなす長崎の歴史風景は、日本の近代化の発祥地であり、先導役でもあったが、悲劇もあった。

これからも長崎学の紐解きに情熱を注ぎたい。最近、天正遣欧使節の果たした役割の大きさに触れた。少年4人は、8年半の歳月をかけ、命を賭して「長崎とローマ」を往復した。巡察師ヴァリニャーノとともに長崎を出発した時は信長が擁護、帰国時は秀吉の禁教令。少年達はまさに「喜悦と悲劇」の運命を味わった。ヴァリニャーノは「日本人は、色白く、高貴、聡明、徳操と学問の能力がある。日本は植民地化には適さない」（『クアトロ・ラガッツィ』）とローマ法王庁に報告している。少年達は、東洋からの使者として、ローマ教皇に謁見し日本人の資質を立証してみせた。彼らの歴史的価値を思う時、我々に課せられた任務にふと思いを馳せる。

4、まんざら捨てたものでもない

地方の小出版社ながら、努力をしていれば、ささやかながら実るものもある。

①ふるさと納税返礼品

返礼品に当社の書籍が選ばれている。特産品でなく書籍が選ばれることに驚き、感激した。これからもジャンルの分類に工夫を加え、登録書籍を増やしたいと思っている。

②読書カード

2年ほど前から、読書カードを始めた。読者の声には、暖かみがあるものが多く、励まされる。もちろん厳しいご叱正もいただくが、それもありがたい。投稿者にメールやはがきで返信している。全国の読者お一人お一人との交流が肌で感じられ、とても嬉しい。

③文化フォーラム

毎年3回ほど、新刊出版後に、著者と読者の交流・対話の場として文化フォーラムを開催している。長崎出身のカズオイシグロがノーベル文学賞を受賞した際、『カズオイシグロの長崎』出版直後のフォーラムでは、国際会議場が埋め尽くされた。出版にも旬がある、と痛感した。

④アンテナショップ

長崎市内の老舗通りに5年前「ブック船長」というアンテナショップを開店した。長崎に関連する書籍や古地図、ポストカードなどを取り揃えている。この夏「周年フェア」を開催し、文献社の直売（HP）とともに、読者層を掘り起こそうと思っている。

5、尽きない悩み

しかし、経営上の悩みが尽きることはない。

最大の悩みは売上高がなかなか伸びないことである。長崎の歴史文化を紐解く会社として、その価値の発信が思うにまかせない。若い人の理解を得るにはどうすればよいか。

歴史を学ぶことには、過去を知るだけでなく、未来を考える座標軸としての現在価値がある。専門性も大切だが、専門的になり過ぎると一般の人の興味が薄らぐ。優しいタッチや漫画、絵本など理解し易い発信とのバランスをどうとっていくか。テレビ局ともタイアップして、活字と映像で理解の浸透を深めることができればと思っている。

二つ目は、在庫本の大量発生である。出版会社としての宿命でもあるが、著者と編集スタッフが、「寝食を忘れて」まとめあげた書籍を簡単に処分するわけにもいかず、かといって、在庫としていつまでも保管し続けるわけにもいかない。「時限再販」制度などを通じて、流通のあり方にもう少し工夫の余地がないものか、考えさせられる。

三つ目は、電子書籍化時代への対応である。電子書籍は低コストやハンディさなどメリットが多く、コミックに続いて一般書籍にも波が押し寄せている。

500年前グーテンベルクが発明した活版印刷を日本に最初に紹介したのは遣欧使節団のドラードであり、幕末、実用化したのは本木昌造である。印刷術を通じた日本文化の発展に長崎は深くかかわっている。紙は、触覚、心地よさに優れ、何よりも知覚によって記憶が長期化する、と言われている。電子書籍の経験を経て「やっぱり紙だ！」と言われる時の再来を待ちたい気もする。

今一つ。今後発展するためには、読者層を拡げなくてはならない。創立20周年を期し、長崎の歴史文化を全国の読者と共有いたしたく「長崎文献社友の会」を立ち上げたいと思っている。魅力的な仲間の会にするため、皆様のお知恵を是非拝借したい。

悩みはチャンスでもある。克服の過程でそのエキスを今後の発展に活かすことができればと考えている。

6、最後に

地方・小出版流通センターには、私どもの書籍を全国津々浦々の書店に紹介いただき感謝している。書店は「知の拠点」、「文化の泉」であるだけに、廃店増は気になる。ある先進国で書店を守るために反アマゾン法が制定されたと聞いた。時代は確かに難しくなっている。

そんな中、地方の出版活動を地方文化のバロメーターとしてご認識され、「本の国体」を主催している「ブックインとっとり」実行委員会には敬意を表したい。私どもも、かつて功労賞、特別賞に選定され感激した。選定基準が公平で、毎年選ばれる地方出版社の書籍はどれも優れた作品で、私どもの編集方針に刺激をいただいている。

出版業界は、年商わずか1兆7千億円、上場大手1社の売上高に及ばない小さなマーケットである。その業界が一億余の日本人の生き方の案内役をつとめている。

私どもも、地方の小さな会社ながら、苦しくとも付加価値の高い仕事に携わっていることに、誇りを持ち、自負心を抱いている。著者との対話を通じた「読書の喜び、楽しみ」が増幅され、「活字文化」のスケールがもっと大きくなることを願いつつ…。

駄文を弄しました。銀行、テレビ、大学等の経験を経て、代表者になってまだ6年目のひよっこです。どんなことでも結構です。機会を得て、ご指導賜りたくよろしくお願い申し上げます。

お読みいただきましてありがとうございました。

（かたやま　ひとし・長崎文献社代表取締役社長）

＊

◎長崎文献社へのお問い合わせ先
・TEL：095 － 823 － 5247
・FAX：095 － 823 － 5252
・E-mail：info@e-bunken.com

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『小さきものの近代1』●渡辺京二著

後期江戸文明を、当時来日した外国人の視点から描いた代表作『逝きし世の面影』をはじめ『江戸という幻景』『黒船前夜』『バテレンの世紀』といった歴史物語を書いてきた著者であるが、最後は明治維新について書こうと、四十年に渡って文献を蒐め続けた、と言う。ついにその念願叶い、二〇二一年一月から熊本日日新聞にこの『小さきものの近代』連載が始まった。その開始時すでに御歳九十。執筆は意外なほど迅速に進んで…と言う著者のその健筆ぶりに驚くが、いよいよここに、その単行本化が始まったのである。

本書の趣向については第一章「緊急避難」に詳しい。維新革命とは、その時代、遠慮ない弱肉強食だった世界に日本が対峙しなければならなかったゆえの緊急避難的措置だったのであり、徳川社会が劣悪であるが故に、その改革のために起こったのではない。虎狼の群れに等しい国際社会に参入するため否応なく強力な国家機構を上から創り上げなければならなかったのである。そこにはより良き個人と社会のあり方を求めるような視点はなく、ひとりひとりの「小さきもの」の幸・不幸など問題とはならなかった。著者はこの、国家次元のストーリーの底流で支配された人々、その「小さきもの」たちの物語をここに描こうというのである。

第二章以降、さまざまな視点から、そのような「小さきもの」たちに焦点が当てられていくが、まず著者は、明治維新が打倒した徳川社会とはいかなる実相だったのかを描く。第二章「徳川社会」は、著者の代表作『逝きし世の面影』を彷彿とさせる内容で、幕末期に来日した外国人の視点によって描かれたその社会の「豊かさ」が、まるで幻のように立ち昇るのである。例えば、長崎出島蘭館長だったG・F・メイランの著書から次のような一節が引かれている。「おそらく世界のどこにも、これ以上安心して眠りにつくことのできる国はなく、そして全体的に人々と品物の安全が保証されているところはないことを、素直に承認せねばならぬ…全アジアの民族のうちで、たしかに日本国民は、教育の最高段階にあるとしなければならない…東洋の国民のうちで最大の進歩を、美術工芸と産業のあらゆる部門で、また技術学問のあらゆる分野で遂げた」。徳川社会が文化的に爛熟した社会であったことは誰の目にも明らかであり、しかも肝心なのは、そのような文化的享楽が、一部の特権階級的上流社会に限られるのではなく、広く底辺の大衆にまで及んだことである、と著者はいう。その時代の苦難の象徴とされた年貢や身分制、間引きに百姓一揆も著者の、具体的な資料に基づく見方からはこれまでとは違う様相を呈する。

第三章「自覚の底流」では、そのような徳川社会のもとでの農民たちの自立した意識に照明が当てられる。以降、ジョン万次郎ばかりではない、名もなき漂流民たちの生涯が語られ、知られざる幕臣たちや戊辰戦争の敗者たちの苦難の顛末が取り上げられる。第八章「女の力」では幕末維新期に生きた多くの妾、芸者といった女性たちの生涯を追いかけ、第九章「黙阿彌と円朝」では、幕末・明治期の庶民感情を語るに欠かせぬ芝居や講談、落語について、中でも黙阿彌と円朝の生涯と作品に言及する。

著者はこの「小さきもの」たちの物語の終点を大逆事件あたりにしようと考えているようだ。「関東大震災あたりまでと考えたが、とてもそれまで生きてはいまい」などと言うが、その先のどこまでも書き続けていただきたいと思う。(N)

◆3000円・A5判・303頁・**弦書房**・福岡・202207刊・ISBN9784863292482

『長崎橋物語 ー石橋から戦災復興橋まで』●岡林隆敏著

長崎の街は西に長崎湾を望み背後に山が迫る平地の少ない街です。流れる川も大河ではない短いものが多く、そこに掛かる橋にも巨大なものはありません。それでも長崎の市街地には日本初の石橋となった眼鏡橋のほかにも、多くの魅力的で歴史のある橋が残っています。そんな長崎の街に掛かる橋たちの歴史をたどったのが本書です。

眼鏡橋をはじめとした石橋はモダンな印象を受けるアーチ橋ですが、こうした石橋はすでに江戸時代に築かれていたというから驚きです。木造だったため今は残っていませんが、廓橋という屋根の付いた趣のある橋もありました。そしてその後明治の時代を迎え、より長持ちする丈夫な橋を目指し、木鉄混合橋の時代を経て鉄橋・鉄筋コンクリート今日の時代へと移っていきます。戦時下では原爆により破壊された橋もありましたし、耐えて今も残る橋もあります。そして戦後の復興の中でも新たな橋がかけられました。そうしたなかでも特筆すべきなのが鉄製の鉄橋（くろがねばし）と鉄筋コンクリート製の本河内新堤防放水路橋梁が、それぞれの材料を用いた日本最初の橋となったことです。まさに長崎は当時の土木技術の先頭を行く都市でした。また同じ材料でも様々な意匠で橋の個性が表現されていたことが、本書に収められた貴重な写真から見て取ることが出来ます。著者の言う長崎市の橋の歴史は日本の橋の歴史の縮図であるということも本書を読めば肯けるところでしょう。（副隊長）

◆ 2000円・A5判・186頁・**弦書房**・福岡・202206刊・ISBN9784863292529

『誰もいない文学館』●西村賢太著

今年2月に54歳の若さで急逝した著者。その訃報に衝撃を受けた人も多いだろう。著者が大正時代の私小説で凋落の果てに公園のベンチで狂凍死を遂げた藤澤清造に深く心酔していたのは有名な話で、清造の月命日には石川県七尾市にある西光寺に墓参を欠かさず、ついには清造の墓の隣に自身の生前墓を建てるほどの傾倒ぶりだった。そして今、著者はその墓の中で眠っている。

そんな著者が藤澤清造を始めとして語り尽くす作家たち。誰もが知る面々ではないとは言え、確かに私小説書き西村賢太の人生を変え、支えてきた幻の作家の人生が息づいている。最初は田中英光にのめり込んでいたものの、29歳の時、酒に酔って人を殴り、留置場に入ったことから人生の敗北を味わい、ふいに以前読んでいた藤澤清造をたまらなく読み返したくなり、そこから心酔。稀覯本を入手するなどして、間違いなく人生を変えたという清造の代表作『根津権現裏』に関しては3回にわたって取り上げている。文芸年鑑の類にも収載されたことのない、全てが幻といった倉田啓明、その名を冠した「島清恋愛文学賞」が創設され、若干メジャー感はあるものの、天国から地獄へ堕ちるような生涯が興味深い島田清次郎など、一般の大正文学史に一切頼らぬ相関図が出来上がったと著者も自負している。清造の？殁後弟子？を名乗り、思う存分浸り切った著者が案内してくれた文学館。たとえ誰もいなくても、じっくりと堪能したいものだ。（Y）

◆ 1800円・四六判・173頁・**本の雑誌社**・東京・202206刊・ISBN9784860114718

『秋田・道路元漂＆旧町村抄』●佐藤晃之輔著

道路元標は、大正8年施行の旧道路法によって規定されたもので、当時全国に約12000あった市町村すべてに設置が求められた。市町村の中心部に設置することにより、道の起点、終点を明確にすることなどを目的としていたが、昭和27年に新たな道路法が施行され、使命を終えている。

この本では、秋田県内28の道路元標の写真、位置図をカラーで掲載し、225の市町村（おおむね昭和29年現在）について、そのあらまし、役場所在地、人口の変化などを各1ページでまとめている。道路元標の多くは放置された状態になっており、著者は文化遺産として、その保存を提唱している。

著者が道路元標を知ったのは平成23年のこと。3つ目を見たときまでは特に興味はなかったが、4つ目を見つけたときに「調べてみたらもっとあるのでは…」と、強い興味が湧いたという。これを昭和の大合併以前の市町村と結びつけ、24の新たな発見にたどりついたというから、ひと通り洗い出すことの価値が感じられる。ひと通り洗い出すことの価値は、広く共通する事柄だが、情報が手軽に入手できる昨今、根気がいる作業は敬遠されがちになっているのではないだろうか。

この本を読むと、興味の対象を見つけ、それを掘り下げることの楽しさがよく伝わってくる。そして、追いかけてきたものが形になるとき、その喜びは何事にも代えがたい。

（HEYANEKO）

◆ 1500円・四六判・279頁・**秋田文化出版**・秋田・202207刊・ISBN9784870226043

『復帰５０年　沖縄を読む －沖縄世はどこへ』●東アジア共同体研究所琉球・沖縄センター編著

沖縄の復帰50年にちなみ、復帰後に刊行された歴史、政治、社会、文化、教育、子ども、まちづくり、民俗、工芸、文学など様々な分野の50冊を、沖縄に関心を寄せる50人の執筆者が、自由に評したブックレビューである。

作家の大城貞俊は、八重洋一郎の詩集『日毒』のタイトルが日本を意味することに衝撃を受け、沖縄文学の特筆の一つは土地の記憶を紡ぎだすところにあり、文学の言葉は生活の言葉によって命を吹き込まれると述べる。市場の古本屋ウララ店主の宇田智子は、大正期に沖縄から東京に出奔して波瀾の後に幼馴染の金城朝永と結婚し、金城の沖縄研究を支え、戦後は沖縄問題に関わった金城芳子の自伝『なはをんな一代記』をユーモラスに紹介する。

沖縄対外問題研究会代表の我部政明は、新崎盛暉の『日本にとって沖縄とは何か』で、新崎が生涯を賭した沖縄研究の原点は、高校生時代に沖縄が日本政権下から切り離されたことを知ろうとしない日本人への怒りと悲しみにあるとし、新崎が指摘した対米従属的日米関係の矛盾を沖縄にしわ寄せする構図が変わらない今、沖縄にとって日本とは何かと問いかける。

東アジア共同体研究所理事高野孟の前書き「復帰50年、これでよかったのか」では、そもそも「復帰」なのか「返還」なのか、沖縄にとって祖国とは、自立とはと根源的な問題提起がされる。50年経っても抱える課題は未だ根深く、新しいことを感じる。（飯澤文夫）

◆1400円・A５判・157頁・**ボーダーインク**・沖縄・202206刊・ISBN9784899824282

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2022年7月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

※当月は、ジャンル【絵本・児童書・学習参考書】に該当する書籍はありません。

【雑誌】

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　０８　ｖｏｌ．６９２　プレスアート編　Ａ４　128頁　５００円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-22644-0　22/08

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　５１１　２０２２年７月号　廣瀬　仁編　Ａ４　191頁　２５４６円　地域環境ネット　［埼玉］　978-4-909864-43-7　22/07

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．６２６　２０２２年６月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　105頁　３２７円　かまくら春秋社　［神奈川］　978-4-7740-0858-5　22/06

◆**詩とファンタジー**　第４４号　伊藤　玄二郎編　Ａ４　80頁　１４００円　かまくら春秋社　［神奈川］　978-4-7740-0863-9　22/07

◆**道**　Ｎｏ．２１３　木村　郁子編　Ａ４　74頁　１１４３円　どう出版　［神奈川］　978-4-910001-24-1　22/07

◆**くらしと教育をつなぐ　Ｗｅ**　Ｎｏ．２３９　２０２２年８／９月号　中村　泰子編　吉田　真紀子編　Ａ５　80頁　８３０円　フェミックス　［神奈川］　978-4-910420-13-4　22/08

◆**アーカイブズ学研究**　Ｎｏ．３６　日本アーカイブズ学会編　Ａ４　119頁　２５００円　岩田書院　［東京］　978-4-503-22636-5　22/06

◆**関東近世史研究**　第９０号　関東近世史研究会編　Ｂ５　102頁　２０００円　岩田書院　［東京］　978-4-503-22643-3　22/06

◆**明日を拓く**　第１３３号　Ｎｏ．２１６　明日を拓く編集委員会編　Ａ５　130頁　１０００円　解放書店　［東京］　978-4-503-22647-1　22/07

◆**仏事**　Ｎｏ．２６２　２０２２年７月号　奥村　昇編　Ａ４　98頁　１５００円　鎌倉新書　［東京］　978-4-503-22632-7　22/07

◆**仏事**　Ｎｏ．２６３　２０２２年８月号　奥村　昇編　Ａ４　84頁　１５００円　鎌倉新書　［東京］　978-4-503-22648-8　22/08

◆**ｔｈｅ座**　Ｎｏ．１１３　高橋　彩子編　Ｂ５　36頁　１０００円　こまつ座　［東京］　978-4-503-22635-8　22/07

◆**セセデ**　ｖｏｌ．７３７　２０２２年８月号　朝鮮青年社編　Ａ４　47頁　４８２円　朝鮮青年社　［東京］　978-4-503-22646-4　22/08

◆**東京かわら版**　Ｎｏ．５８９　２０２２年８月号　佐藤　友美編　203mm × 110mm　158頁　５４５円　東京かわら版　［東京］　978-4-910085-24-1　22/07

◆**こどもとしょかん**　第１７４号　張替　惠子編　Ａ５　33頁　７１０円　東京子ども図書館　［東京］　978-4-503-22642-6　22/07

◆**みんなの図書館**　Ｎｏ．５４４　２０２２年８月号　図書館問題研究会編　Ａ５　80頁　７５０円　図書館問題研究会　［東京］　978-4-503-22639-6　22/07

◆**おりがみ**　Ｎｏ．５６５　２０２２年９月号　日本折紙協会編　Ａ４　51頁　７２８円　日本折紙協会　［東京］　978-4-86540-118-9　22/08

◆**海運**　Ｎｏ．１１３８　２０２２年

第35回 地方出版文化功労賞受賞作が決定

第35回 地方出版文化功労賞受賞作が以下の通り公表されました。

＊＊＊

第35回地方出版文化功労賞は、本年7月10日の最終審査会において決定した。同賞は、昨年11月2日から11月8日、鳥取県立図書館で開かれた「ブックインとっとり2021」に出品展示された全国の地方出版物（対象約350点）の中から、各地区の推薦委員および一般の来場者による会場での投票によりその中の10点を最終候補作として挙げ、8名の審査員が持ち回りで数カ月にわたって審査したものである。結果は以下のとおりです。

●第35回　地方出版文化功労賞

該当なし

●第35回　地方出版文化功労賞　奨励賞

■『秘傳 鱧料理　百菜　改訂』

著者　朝尾朋樹（あさお　ともき）
ISBN　9784763807540
発行所　京都新聞出版センター（京都府）
発行者　前畑知之
体裁　248頁　定価5,000円＋税
発行　2021年7月1日刊行

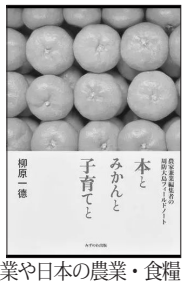
＜選考理由＞

新鮮な海産物が手に入れにくい京都で独自の料理法が発達を遂げ、京都の、特に夏に欠かせない鱧。その鱧の処理法を過去にあったものをよみがえらせ、かつ独自の工夫により生み出した著者が、その技法と料理を伝えようとした、「長年京料理に携わってきた料理人の引退鱧料理論文（改訂版あとがき）」である。全身に小骨のある鱧は、骨切りによって処理されてはじめて料理の材料となり、その技が競われている。この鱧を骨抜きで処理することにより、あるいは生きた鱧を湯通しすることでそれまでにない料理の提供を可能にした。

そのほかにもさまざまに工夫された技法やそれを生かした様々な料理が、多くの美しい写真や図解によりあますところなく、かつ分かりやすくあらわされている。１９９７年に発行された旧版でもそれは十分に伝えられているが、さらに改訂により、細い骨があまりに多いため作成が難しかった鱧の骨格標本や、日本料理以外にも鱧を広めたいと「ぎおん萬養軒」のフランス料理を加え、技法もより容易に取り組める方法に触れることでこの本の価値をさらに高めた。改訂版である点で賞に該当するかという疑問が審査過程であったが、地域の文化である鱧料理普及への著者の強い思い、新たに加えられた部分の重要性などが高く評価され、対象となると判断した。これからに残したい文化的資料である。

■『本とみかんと子育てと　農家兼業編集者の周防大島フィールドノート』

著者　柳原一徳（やなぎはら　いっとく）
ISBN　9784864260466
発行所　みずのわ出版（山口県）
発行者　柳原一徳
体裁　672頁　定価3,000円＋税
発行　2021年1月30日刊行



＜選考理由＞

移住した周防大島で編集・出版、みかんづくりと子育てを行う著者による、日々の記録である。みかんづくりの記録がベースになっているが、いわゆる農作業日誌を超えて島の農業や日本の農業・食糧問題などへの考察も記録されている。さらに、かつてジャーナリスト、現在は出版を営み、その間の様々な経験や、神戸に育ち、幼少期の島の生活や東京などでの生活も体験した著者ならではの観察、感想や考察が、幅広いジャンルにわたってちりばめられている。

なかでも農業と島の生活に関しては、実践者ならではの試行なども踏まえた記述に、ハッとさせられることが多い。一方で、通して読むことの大変さや一般の読者に勧められるだろうかという意見、評価自体が難しいという審査員も一定数あった。

それでも巻末の資料編を含めこの本が著されたことにより、なかなか残りにくい時代と場所の記録を切り取り、文章として後世に残すことの価値は審査員に共通して認識された。幼少期に島の生活を体験したよそ者としての視点を持ち、いままさにそこで懸命に生活している著者ならではの記述による民俗学的資料的価値の高さと、それをベースに一貫したぶれない立地点からの鋭い論考がこの本への高い評価につながった。

●第35回　地方出版文化功労賞　特別賞

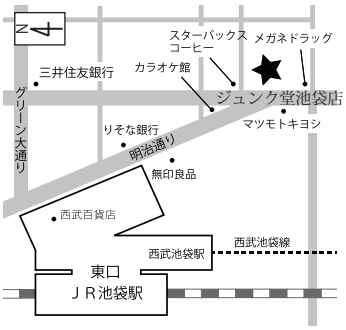
（以下、地方・小出版流通センターでは不扱い）

■『スマホで見る 阪神淡路大震災　災害映像がつむぐ未来への教訓』

著者　木戸崇之（きど　たかゆき）・朝日放送テレビ株式会社
発行所　株式会社西日本出版社（大阪府）
発行者　内山正之
体裁　220頁　定価1,500円＋税
発行　2020年12月21日刊行

＊第35回　審査委員（2022年7月現在）
審査員長＝齋藤明彦（元鳥取県立図書館長）
審査員＝岩田直樹（公立鳥取環境大学特任教授）、上田京子（鳥取短期大学講師）、山脇幸人（元倉吉市立図書館長）、小林隆志（鳥取県立図書館長）、岡村知子（鳥取大学准教授）、松井潔（元鳥取県埋蔵文化センター室長）、村上博美（鳥取県立図書館司書）

ジュンク堂書店
淳久堂書店
池袋本店
営業時間：月～土 / 午前10時～午後11時
日・祝 / 午前10時～午後10時
池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？
９階「ふるさとの棚」では、
地方・小出版流通センター扱いの
ご当地本を幅広く取り揃え、皆様の
お越しをお待ちしております。
〒171-0022
東京都豊島区南池袋2-15-5
TEL　03-5956-6111
http://www.junkudo.co.jp

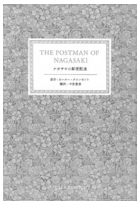


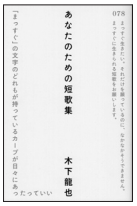
売行良好書

期間：2022年7月15日～8月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

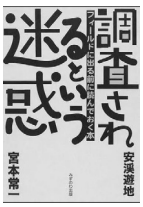
(1)『暴れ川と生きる』1900円・忘羊社　(2)『ナガサキの郵便配達』809円・スーパーエディション　(3)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(4)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(5)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(6)『新　岡山の山１００選』2500円・吉備人出版　(7)『韓国の「街の本屋」の生存探究』2000円・クオン　(8)『某月某日　シネマのある日常』2300円・編集工房ノア　(9)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社　(10)『大阪の風呂屋を歩く　大阪市内編１』1600円・さいろ社　(11)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(12)『情報の歴史２１』6800円・編集工学研究所

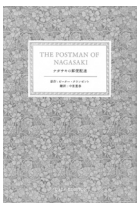


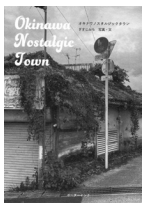


［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『前橋城考』1500円・上毛新聞社　(2)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(3)『ナガサキの郵便配達』809円・スーパーエディション　(4)『某月某日　シネマのある日常』2300円・編集工房ノア　(5)『オキナワノスタルジックタウン』2400円・ボーダーインク　(6)『北の磯魚生態図鑑』2800円・北海道大学出版会　(7)『カミーユ』2000円・書肆侃侃房　(8)『暴れ川と生きる』1900円・忘羊社　(9)『つながる沖縄近現代史』2200円・ボーダーインク　(10)『恐竜学博物館図鑑』900円・日本文教出版　(11)『石垣から読み解く富山城』1300円・桂書房　(12)『統一教会』4700円・北海道大学出版会　(13)『障がい者が主役のカフェ喫茶を地域にひらく』1500円・フェミックス　(14)『鎌倉街道を歩く』2300円・さきたま出版会　(15)『革命家　源頼朝　隷属から「一所懸命」確立へ』2000円・花乱社　(16)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版







以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼「Under 35 Architects exhibition 35歳以下の若手建築家による建築の展覧会」が本年も大阪駅前・うめきたシップホールにて開催されます。これからの活躍が期待される35歳以下の出展候補者を全国から募り、厳正な審査を経て選出された建築作品の展覧会です。また、その出展作品の中から優秀な作品を選出し、Under 35 Architects exhibition 2022 Gold Medal賞、Toyo Ito Prize（伊東賞）が授与されます。本展は、これからの活躍が期待される若手建築家に発表の機会を与え、日本の建築の可能性を提示し、建築文化の今と未来を知る舞台となります。

【会期】
2022年9月30日(金)～10月10日(月)
12:00～20:00／期間中無休　最終入場19:30／※最終日は16:30最終入場、17:00閉館／入場料は1,000円

・関連書籍『U-35 Under 35 Architects exhibition 2022』ISBN 978-4-905436-22-5は、本展図録となります。

＊

▼【週刊朝日】誌上にて、読書の秋に向けて〈我が故郷の名著はこれだ!! 2022年秋、本の甲子園〉と銘打たれた書籍版甲子園を開催するとのことです。全国47都道府県の書店商業組合の理事長が経営する書店のご担当者に「その地方の出版社が1年以内発刊した故郷の名著」を選んでもらい、書評を掲載する、という企画です。掲載予定は、東日本エリアが8月30日発売号、西日本エリアが9月6日発売号とのことです。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントはネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットでご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。
honto.jp